慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドンソン青銅器文化の起源に関する一試論
Sub Title	A tentative theory of the origin of the Dongson Bronze Culture
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.35, No.1 (1962. 6) ,p.65- 96
JaLC DOI	
Abstract	The archaeologists have shown the great interest toward the problem of the origin of the Dongson bronze culture, especially that, of the bronze drum, its characteristic remain. But, even now, they differ in opinion as to the date and place of the origin of this culture. The writer tries to discuss this problem in the relation to the ceramic complex which prevailed in this area before the Dongson bronze culture. The ceramics from the Dongson brouze culture sites can be devided into two different main types. Type 1: They are simple potteries and often badly baked, usually dark red. The surfaces of almost of them are covered with the impression of the strings or cord-marked. Type 2: These ceramics have the geometrical impressed patterns on the greater part of outer surface. The surface treatment is fine. The globular or cylindrical vases with flat bottom represent its principal forms. The type 1 potteries resemble to those from Da-But shellmound, Bau Tro site, Sa Huynh site in Viet Nam aud Lanma island site in South China, all of which belong to the late neolithic or neolithic culture. The type 2 potteries, closely similar to those requently found in the brick tombs and kilns, belong to the category of the Stamped-pattern pottery complex which spreads from south bank of the lower Yangtze to the Southeast Asia along the coast of the South China sea. Probably, the writer supposes, the Dongson bronze culture has an intimate relation with the Type 2 pottery or the Stamped pattern pottery complex and the origin of the Dongson bronze culture can be seeked for in the process of development of the Stamped pattern pottery complex. The Stamped pattern pottery culture in the Si-kiang delta around Canton and Tonking delta area accepted one type of the Ch'u bronze culture in Hu-Nan, the central China, in the 4 th or 3rd centuries B. C. The Ch'u bronze culture, passing over the Nan-Ling, came into contact with the Stamped pattern pottery culture in the Si-kiaug basin and extended itself to the Tonking delta. This cultural adaptation of the bronze culture to the South China seacoast aud its acculturation play the important role in the origin of the Dongson bronze culture. Therefore, the writer may conclude that the Dongson bronze culture originate in the process of expansion of the Chinese bronze culture to the south. More exactly, it is an adatped pattern of the bronze culture, not Chinese bronze culture itself.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620600-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドンソン青銅器文化の起源に関する一試論

近森　正

序　研究史的整理
Ⅰ　先行文化の問題
Ⅱ　印文土器文化領域
Ⅲ　青銅器文化のかさなり
（A）揚子江・銭塘江水系領域
（B）南シナ海沿岸領域
Ⅳ　ドンソン文化における戦国期青銅器文化要素
Ⅴ　珠江水系領域におけるドンソン文化の起源的様相
結　語
註

序　研究史的整理

青銅利器、容器及び銅鼓などを主な指標とするドンソン文化は、南シナからインドシナ半島、インドネシアの殆ど全域にひろがっている。ドンソン文化の起源に関して、従来の研究の多くは、銅鼓の出自をめぐってとりあげられてき

た。銅鼓の起源地について、一八九六年 J. D. E. SCHMELTZ はインドを考え[1] F. HIRTH は、シナ起源を想定し[2]、ついで A. B. MEYER と FOY は、SCHMELTZ 説に反対してカンボジア起源説を展開した[3]。その後、J. J. M. DE GROOT は、ひろく漢籍を渉猟して銅鼓の南蛮起源説を立てゝ、紀元のはじめころ広東西南部において蛮人がこれを作ったのであるとした[4]。この見解は銅鼓研究の最初の最も徹底的な研究を成遂げた F. HEGER によっても支持され、HEGER 自身、発見されている銅鼓の三つの初期形式の分布について、その分布の中心がシナの南境、ことにトンキンと北部アンナンとの境にあることを指摘した[5]。明治三五年、西南中国を旅行し苗族の調査を行った鳥居竜蔵博士は、その報告書の中で特に銅鼓について論じ、広東省の山岳部西南地方に銅鼓の起源地を求めた[6]。しかして一九二四年から二八年にかけてフランス極東学院によって M. PAJOT のもとに行なわれた北ヴェトナム Dong So'n における古墓群の発掘の成果は、この問題に対して新たな考察を要求するようになった。一九三二年、V. GOLOUBEW は、Hanoi で開かれた第一回極東先史学会議で発表した「銅鼓の起源及びその伝播[7]」の中で、銅鼓のデザインが漢代の青銅器と類似していることに注意し、銅鼓がドンソンを中心とするトンキン南部からアンナン北部地方に起源するものであり、それがこの地方の山岳地帯に居住するインドネシア系の種族によって、シナからやってきた工人の影響のもとに青銅技術を発展させたものであるとした。また、R. HEINE-GELDERN は、銅鼓にみられる各種の文様の比較を通して、ドンソン文化の起源が、ヨーロッパのハルシュタット文化、ダニューブ、コーカサス地方の青銅器文化にあることを Pontic migration との関連において説き、その年代を紀元前八世紀頃においた[8]。しかるに一九二四年 B. KARLGREN は、銅鼓に特有な文様要素の詳細な分析と比較に基いて、銅鼓の起源に淮河流域の戦国期青銅器文化が南下流入していることを主張し、淮河式青銅器の年代から第一形式銅鼓の年代を紀元前四・三世紀におき、その下限を王莽の貨幣を伴うドンソン遺蹟の

発掘所見よりして数百年を見込んだのである。[9] この結論に対して、梅原末治博士の指摘されるように、淮河式青銅器文化のものと銅鼓との間には、たしかに文様のディテイルは類似するが、銅鼓には戦国式青銅器にみられるような笵による単位文のくりかえしが認められない。[10] また銅鼓に特徴的な羽人の文様について、充分な説明が出来ないなど問題があるが、その年代観については、現在かなり適確なものとして認められている。ドンソン文化の上限年代を戦国期にもとめる考えは KARLGREN 以来、O. JANSE、梅原博士らによつて実証的に推進された。梅原博士はインドシナから出土した銅戈の実例を集め、それを年代観の問題解決に適用され、インドシナの青銅器文化の年代が、GOLOUBEW の所論よりも遡るべきことを示唆した。[11] それ以後、銅鼓の起源地の問題を最も積極的にとりあげたのは、凌純声 LING SHUN-SHENG である。凌純声はシナ古文献に現われる多くの銅鼓に関する記事を集成し、その結果、銅鼓が湖南省麻陽、及び四川省南部の興文県に最も多くみられることから、銅鼓の起源地が江西、湖南、湖北にわたる揚子江中流域にあるとする。そして、それは西暦以前こゝに居住した黎獠族、彼によればインドネシア族が作つたものであり、それが揚子江の河神を祭るのに使用したのが銅鼓であると考えた。[12] これに対し、松本信広先生は、銅鼓の発生した地域がインドシナ北部ではなく、もつと北方にあるとする凌純声の推定に賛意を示めしつゝ、しかしその文化は「シナ」自体に発生したものではなく、シナ金属文化が拡大する過程において、シナの南辺に居住していたインドネシア系民族のうちに発生した。というのは、南シナの原住民族の文化は、今日、東南アジアの民族が、かつて所有していた古文化と共通するものが多く、銅鼓にみられる杭上家屋、竪杵、竪臼、舟型屋根、犀鳥、ゴンドラ式船、それに靴型斧などのデザインは、インドネシア文化圏の要素と同一系統である。そこで中シナ浙江省杭州附近の黒陶文化遺蹟から、靴型青銅斧の祖形とみられる石斧が発見されることを考えて、銅鼓文化の発生地を凌純声の説くような、内陸の局限された地方でなく、むしろ太平洋

沿岸の浙江、福建、広東、広西の、かつての越族の居住地に比定する。それは日本の古代文化とも関係をもつ鳥船信仰を伴なつた、まだシナ的にならぬ以前の太平洋周縁文化にほかならないことを説かれている。[13] なお、近年、雲南省晋寧石寨山墓葬遺蹟から多くの銅鼓が出土して注目された。[14] この遺蹟にみられる文化様相は、たしかにドンソン文化と共通するものを持つている。[15] しかしながら、今までのところ、こゝにドンソン文化の起源を求め得るような手がかりは何も見当らない。

さて、銅鼓の研究は非常に古くから注目されてきたが、銅鼓を含むドンソン文化の起源地の問題については、まだ一層の探索の余地を残している。この研究が科学性を持つようになつたとみられる一九二〇年代後半以降、すなわちドンソン遺蹟の発掘結果が明らかになつた以後、とくにドンソン文化のオリジンに関して最も大きな業績を残した HEINE-GELDERN, KARLGREN の論考についてみると、それは文様要素の系譜的ウル・フォルムの追究としてなされ、伝播論ないしは系譜論として発展したようであり、考古学的に起源地の積極的な探究がなされていない。この意味で結論こそ異るとはいえ KARLGREN 説は、実は HEINE-GELDERN 説の発展とみられる。これらの研究は、文化要素の波及という点を強調し過ぎたために、かえつてドンソン文化の本質的な文化内容の把握をおろそかにしている。そのために、それを一つの文化のまとまりとして、複合体的な把握がなされていないのである。文化要素の類似だけから、全体としてのドンソン文化の起源を決定することは危険であるように思う。

I　先行文化の問題

北ヴェトナム・ドンソン遺蹟の発掘調査は、その後一九三五年、三六年、三九年の三回にわたつて O. JANSE 博士

の手によつて続けられ、とくに住居址遺蹟について、その成果を記したモノグラフの第三巻の結論において、「紀元前三・四世紀、シナの影響があらわれる以前には、そこには石器時代文化のレヴェルの Indonesian 或は Proto-Malayan people すなわち現在の Moi 族の祖先が居住していた。シナ・パイオニア、それはおそらくシナ化したタイ Sinicized Thai の到達によつて青銅や鉄製の道具や武器の使用を学び、多くの文化要素をシナ民族から受けとつた。[16]」とのべている。ともかく、ドンソン文化の早い時期が文化的にも時間的にもシナ青銅器文化のあるものと淵源的に深いつながりを持つていたことは明確である。そこで青銅器文化としてのドンソン文化のオリジンを考察するときに、それを受容した母胎文化として、新石器終末期文化の側からも分析がなされなければならない。ドンソン文化を、その先行文化との関係について注意すべきことを指摘したのは梅原末治博士であつた。博士は「それに先き立つ文化の存在」に対して、ヴェトナムの Da-But 出土の土器類、及び有肩石斧をあげられた。[17]

そこで、ドンソン文化のタイプ・サイトであるドンソン蹟遺の Loc. 3, 5, 6, 6bis 各地点出土の土器類についてみると、そこには大別して二つの異つたカテゴリーが認められる。

〔第1類〕比較的シムプルな土器。粗雑なつくりで焼成は概して不良。器面の色調は普通、暗褐色、赤褐色或は灰色味を呈する。器壁の厚さは四〜五粍で幾分薄く、非常にもろい。したがつて出土したものは破片が多く、完形のものは僅かであるが、復元推定し得る器形の大部分は球形、ないし半球形で、しばしば腹部、赤道線をめぐつて段、或は小さな隆起帯を附し、低い逆皿形の台がつくものがある。器高は六〜一二糎、口径一〇〜一三糎。把手やノブをもつものはない。文様手法は、次の如く四種類を認める。a種・撚糸圧痕文（Cord-marked, Poterie au panier）。撚糸が器体に対し縦位におかれるものと、横位のものとがあり、平行に密接して並ぶ。それは殆ど器面全体にわたつて施される

が、そのうちのいくつかには、長さ四糎、巾三〜四・五糎内外の方形を一つのユニットするものが認められ、屢々その両端は、他のユニットとわずかにオーバーラップしている。これが、パッディング形成の際の拍打によるものであることは明らかである。その他、撚糸を斜方向に附し、再び逆斜方向より施した結果、菱形の網目文様を構成するものがある。この種のものは撚糸の不明瞭なものが多い。b種・沈線文。直径三〜五粍の竹を半截し、割截面を器面に押しつけて、ひきずり平行沈線を施したもの。これを基本要素として幾何学文様を構成するもの。その他、竹の鋭利な先端でもつて、簡単な曲線、ジブザク状の沈線を刻み込んだもの。c種・条痕文。篦形の道具でもつて条痕を施したもの。d種・角のある細い沈刻をクラブでもつて施したもの。なお、Loc. 6 から土製支脚が出土している。[18] これらは、塼室墓や窯址からは全く出土しない。

〔第2類〕焼成良好で、陶質は比較的堅く、褐色、黄色を呈し、幾何学的で精巧な印文を施す。基本的形態は、球形ないしは筒形で、平底をもつ、器高一二糎、口径二〇糎程度の甕ないしは壺、又は、平底をもつ半球形の浅鉢で、これらは塼室墓や、Tam-thô（phú of Dong-so'n）の窯址出土のものと共通するものである。文様は、パッディング・インプレッションによる一辺四〜六粍程度の方格文を器面全体に施したもの。ある種の小さなローラーによる魚骨文様の圧痕をもつもの。円の中に十字文（quatre feuilles）を附けた文様、その他複雑な文様をスタンプしたものなどがある。その他に把手を持つ茶色味を帯びた釉薬のかゝつた硬質の土器もあり、ユニークなものとしては、Loc. 6 出土の青銅器を模したと思われる香炉形土器があり、また、Loc. 3 の Indonesian 墳墓からは、明らかにシナ・プロパーから導入されたものと思われる灰白色で釉薬の施された Baluster 形の壺がでている。

さて、第1類の土器の中には台付土器が含まれるのに対して、第2類には、それがみられず、全て丸底或は平底であ

る。これは両者の間の成形上のテクノロジカルな相違を暗示しているばかりでなく、W. G. SOLHEIM によれば、一般に東南アジア新石器文化において、所謂、Cord marked Pottery（第1類撚糸文土器）は、Checker stamped Pottery, Paddle-impressed cross relief（第2類方格文、菱形文、山形文土器）より早く現われる。[19] こうしてみると、第1類の土器は、新石器後期の北ヴェトナムの Da-But 遺蹟、Bau Tro 遺蹟、南ヴェトナムの Sa Huynh 遺蹟、南シナ香港の Lamma Island 遺蹟、などの一群の土器類と連系があると考えられ、第2類の土器は、たしかに、揚子江以南の中シナ、南シナに分布する印文土器のカテゴリーに入るものである。そして、ドンソン遺蹟からは、多くの印文土器にともなつて有肩石斧が出土し、雲南石寨山遺蹟からも、同じく有肩石斧を出しているが、これもまた、印文土器文化の様相と一致する点である。各地のドンソン文化に属する諸遺蹟は、つねに印文土器文化との密接な結びつきを示めしている。そこで、印文土器文化は、新石器時代より、戦国、漢代にわたつて発達をみるが、その発展過程の中に、ドンソン文化の開花の状況をみることが出来るのではないだろうか。シナ文化の南方周縁にひろがつていた新石器文化における青銅器の受容、出現の状態の中に、ドンソン文化の起源が秘められていると思われる。

Ⅱ 印文土器文化領域

印文土器は、器面に幾何学的な印文をもつものが多く、泥質、或は夾砂質の土器である。尹煥章によれば、中国大陸部における印文土器を伴う遺蹟は次の如くである。[20] 安徽・淮河以南から揚子江両岸まで…1績溪胡家村、2肥東竜城、大城頭、大陳墩、3当塗天子坟、4馬鞍山市慈湖。江蘇・揚子江下流域附近…1南京北陰陽営、2南京鎖金村、3南京安懐村、4燕子磯誠実村、5江北団山、6揚州鳳凰河、7丹徒大港など五七遺蹟。秦淮河両岸附近…1湖熟を中心とす

る老鼠墩など四〇遺蹟。太湖の東、西、北の三面…1宜興高塍、2無錫錫山、仏蠡墩、3呉県越城、3金鶏墩、4唯亭、5呉江同里など三〇遺蹟。南部広徳辺境附近…1溧陽、2社渚、3金山県金山衛（とくに無錫漳山と社渚には印文土器を伴う多くの墓葬遺蹟がある。）浙江…1呉興県銭山漾、2杭州老和山、3餘杭北子里、4石瀬鎮、5余姚県茅湖、6嘉興県双橋、7武康県紅家嶺、8温州羅浮山、9蕭山県臨浦（紹興漓渚、寧波、上虞などにも多くの印文土器を伴う遺蹟がある。）江西…清江の樟樹鎮を中心とし贛江平原及び沅香溪の丘陵辺縁に沿つて三〇遺蹟。福建…閩江上流域に光沢、下流域附近では、曇石山、鯉魚山、南部では華安県大地郷、武平県尺馬山、南安、恵安、廈門、竜岩、連江、河田。広東…海豊、宝安（蚌地山、金坑山、姜公釣、魚山、黄策捕魚山など）潮陽（葫蘆山、走水嶺山、糞箕坑山、九斗尾山など）香港、広州、海南島の諸遺蹟。湖北…圻春、漢口載家山、京山屈家嶺。

さらにインドシナでは、ドンソン遺蹟を中心として Mân-thôn（Tho-xuân), Ha-trung, Ngoc-am（Quang-x'uo'ng), Lach-tru'ông（Hâu-lôc）など主として墓葬遺蹟に伴つて印文土器が出土する。北ヴェトナム北部、トンキン湾沿岸地帯に分布する。カンボジアでは Samrongssen 遺蹟から二重菱形文に近似した印文土器が出ているが、明確ではない。[21] マレイでは、H. G. Quarich Wales によれば、Johore から出ている。[22] 台湾では、中国大陸部からの影響で、西海岸に分布を示めし、ことに台南附近の諸遺蹟にみられる。[23] また、最近、Solheim はボルネオのサラワク西部 Bau の土器を印文土器と関係ありとしており、[24] フィリピンにも印文土器と同じ手法による土器のみられることを注意している。

さて、これらを地図上にプロットしてみると、大陸部について、それらはいたつて特徴的な分布を示めしている。すなわち、そのひろがりは、揚子江の両岸から以南、江蘇、安徽、湖北、湖南、江西、浙江、福建、広東の諸省からヴェ

トナム北部にわたつているが、その北限についてみると、江蘇省では、南部に濃厚な分布を示めすが、北部は揚州あたりまでで、淮河流域に及ばない。淮安県青蓮岡、新沂県花庁村遺蹟などにはみられない。[25] 安徽省でも、北は合肥までで、淮河流域の嘉山泊岡や寿県の諸遺蹟にはない。[26] 湖北省では、圻春県の諸遺蹟、漢口載家山[27]にはあるが黄石市にはない。[28] 天門石家河にはみられず、京山県の屈家嶺にはあるが著しくない。[29] さらに揚子江中流では、宜昌の諸遺蹟からも全く報告されていない。したがつて、それが淮河水系につながるものではなく、武昌以東、揚子江下流水系の斜面に関連を有するものであること。今までのところ、そこに北限ラインを見出すことができるようである。そして、南は福建省の閩江中、下流域及び南部の山麓地、広東、香港、北ヴェトナム北部にかけて、東シナ海から南シナ海に面する東南沿海地帯にのびている。東は、太湖周辺、銭塘江中、下流域、杭州湾沿岸、西は、江西の清江にみられるが、湖北西部、湖南では、かなり稀薄になる。

揚子江下流水系地域を中心とする早い時期の印文土器文化の遺蹟は、湖岸や、河川に沿う小丘上にある場合が多い。いわゆる台形遺蹟（Mound Dwelling site）である。杭州湾贛江、閩江流域、福建南部地域では、河川や海に突出した舌状台地上にある。曇石山遺蹟は、閩江の谷にのぞむ舌状小丘の上にあり、福建南部の華安、武安などでは、附近に水田のあるような小溪谷にのぞむ丘の上に位置する。また、広州地区においても広東潮陽の葫蘆山、走水嶺山、宝安の諸遺蹟も小丘上にある。これらは基本的に揚子江下流水系の台形遺蹟と同一である。台形遺蹟と印文土器文化の関係は、江蘇省とくに北部についてみると、曽昭燏の説くように、[30] 絶対的なものとは言えないが、全体的には、水辺と関係の深い遺蹟立地の共通なプリンシプルとみることができ、印文土器文化を通じて、その性格を決定している。[31] 中国の研究者は、印文土器を泥質の印文軟陶と、夾砂質の印文硬陶に大別している。揚子江下流域の南京、湖熟、大港、無錫な

どの諸遺蹟の発掘結果によれば、下層から軟陶が出土し、上層に硬陶が増加する傾向がある。しかし南シナ、インドシナでは明らかでない。現在、発掘調査の層位的データは、揚子江下流域及び他の一部の遺蹟をのぞいて殆ど不完全であり、確実な所見に接することが出来ないために、いま、こゝでは、江蘇南部を中心とする揚子江下流域における年代観を示めし得るにすぎない。すなわち、印文軟陶は、発生的には新石器文化の所産であるが、年代は、殷、西周から春秋戦国期まで。印文硬陶は、春秋戦国期より漢代までに相当する。南京鎖金村遺蹟では、夾砂紅陶と印文軟陶を出す文化層から、殷末周初スタイルの青銅製刀子、鏃が伴出し、[32] 溧陽の社渚遺蹟からは、胡の長い商周の青銅戈を模した石戈が、印文軟陶の文化層から出土している。南京北陰陽営、鎖金村その他の遺蹟から銅のスラッグが出ることからみて、殷末周初の中原の文化が、青銅器とともに入り、この地で青銅器鋳造がはじまつたと考えられる。[33] 台形遺蹟の上層から出る印文硬陶には、春秋戦国期の青銅器を模した形が行われ、焼成火度も高くなり技術の進歩がみられる。このように、江蘇、安徽、浙江にわたる揚子江下流域では、印文土器は、その早い時期から中原殷末周初の青銅器と並存する。しかしながら、福建、広東、インドシナ北部を中心とする沿海地域では、この期の青銅器文化の影響は全くみられない。この地域における早い時期の印文土器文化は、あくまで、新石器文化の様相を呈している。それら両地域の間に、青銅器文化の受容の際の遅速の差をみることが出来るのである。

印文土器の文様パターンは、軟陶と硬陶との間に、あまり大きな区別はなく、年代が下降するにつれて、硬陶の方が文様が精致になつていく傾向がみられる。その種類は非常に多いが、それらは、山形文系、方格文系、渦文系の三種に大別できる。[34] これらのうち渦文系と山形文系は、広東、福建の沿海地方に卓越して分布しており、ことに山形文系は、広東海豊 Sak 文化の代表的なものである。また、とくにダブルF文は、海豊から香港、広州にかけての地域にのみ、

典型的な分布を示めし、五嶺を越えて以北にひろがつていない。福建省福州浮村の新石器時代文化層から、印文土器とともに出土した石環は、[35] 広東潮陽、宝安、飛鵝嶺、香港 Lamma 島、Lantau 島、Shek Pek, インドシナ Pho-Binh-Gia 洞窟上層、Ban-mon, Cho-Ganh, カンボジア Samrongsen などの諸遺蹟から出土するものと共通する。これは Tubular borer によるもので、鹿野忠雄博士は、これらを東南アジアに特有な文化要素の一つに数えている。[36] また、香港 Lamma 島出土の有角玦状石輪は、[37] ドンソン遺蹟出土の青銅製玦輪（釧）と関係があるといわれ、その分布は、北ヴェトナム Dong Hoi, 南ヴェトナム Quan Gai, Sa Huynh, フィリピン Batangas, 台湾の諸遺蹟にひろがつている。[38] さらに福建と広東東部沿岸地帯には有段石斧が卓越し、広東増城以西から海南島にかけては、有肩石斧の分布が密である。なお有肩石斧は、清江附近に一例あるのみで、湖南、湖北の内陸部には入つていない。

これらに対して、南京北陰陽営から出土した多くの有孔石刀は、揚子江下流、中流域の印文土器文化に一般的なものであり、それは竜山文化からの系統をひくもののようである。一般に有孔の石器は竜山文化の表徴であるが、安志敏と饒惠元によれば、有孔石刀は仰韶文化の晩期に出現し、竜山文化期を経て、金属器時代に至るまで存続しており、その分布範囲は、黄河流域、東北の一部から揚子江流域に及ぶが、広東沿海地方には稀薄である。[39] 印文土器文化の中で有孔石器は、揚子江流域に卓越しており、広東沿海地域には基本的にはみられない。[40]

さて、このようにみてくると、比較的早い時期の印文土器のひろがりの中に、相互にかなり強い異質化の傾斜を示めしている二つの地域を描くことが出来る。すなわち、Ⓐ竜山文化の残存的影響が、とくに石器においてみられ、中原青銅器文化が、非常に早い時期に侵透した揚子江流域と杭州湾沿岸地帯＝揚子江・銭塘江水系領域。Ⓑ文化要素の多くを、東南アジア地域と共有する閩江流域以南の福建南部と広東、北ヴェトナム沿岸地帯＝南シナ海沿岸領域。

こうした文化様相上の差異は、自然条件との関連において、それぞれの地域構造と強く結合しているようである。揚子江・銭塘江水系領域と南シナ海沿岸領域が、沿海地帯を通じて、ある程度、流動性を示めしているのに比べて、南嶺山脈（Nan-ling）を越える両領域の文化関係は、エコロジカルな要因によつて、全く遮断されている。新石器文化期において、南嶺山脈の連らなりは、完全に文化的・生態学的分界線を形成していたと考えられる。揚子江中流域と広東沿海地域が、緯度に対して直角に文化関係を成立させるのは、次の文化ステージを待たなければならなかつたのである。

Ⅲ　青銅器文化のかさなり

次に、印文土器文化領域を受容基盤として、その上に青銅器文化が重さなり、ひろがつていくプロセスを、そこに現われる受容形態の地域差と変容について観察してみたい。

（A）〔揚子江・銭塘江水系領域〕この地域における青銅器の出現は、前章でもみたように、非常に早い時期に属している。むしろ印文土器自体、殷周青銅器文化の導入によつて、新たに発展をみたことが考えられる。尹煥章らは、揚子江下流域、南京～無錫の間に、一五二の台形遺蹟を調査し、その文化が黒皮磨光陶の高杯、瓿、罍、鉢、皿にみられる殷末周初様式や、小形の青銅器の伴出することなどからみて、殷末周初の青銅器文化が、この地方に及んでいることを強調している。[41] 南京北陰陽営の上層（第3層）安懐村の第2層、鎖金村、江蘇湖熟鎮の下層などから石器、印文土器とともに出土した青銅の鏃、刀子、鈴、鑿などは、たしかに殷末周初の型式を示めしており、また他の文化要素にみられるファクターからみても、中原の殷周転換期ころの青銅器文化が、台形遺蹟の印文土器を伴なう文化の上に影響を与

えていたことがわかる。そして西周期に入ると、中原から揚子江を越えてくる影響は決定的なものになつたようである。江蘇丹徒県煙墩山[42]、儀徴県破山口[43]。安徴屯溪[44]などからは、西周各期の青銅器が出ており、揚子江下流域の安徴、江蘇省には、西周代にすでに殆ど劃一的な中原青銅器文化が南下してくる[45]。屯溪西周墓では、印文土器の終末的様相が現われている[46]。そして春秋戦国期に至つて、完全にシナ・プロパーに繰り入れられてしまうのである。

このようなプロセスは、揚子江中流域についてもみられる。湖北天門県石河家遺蹟[47]における文化様相などから、この地域も揚子江下流域とほゞ同じ頃、中原シナ青銅器文化の影響をみることができ、春秋末から戦国期に入ると、長沙を中心として、揚子江中流域、洞庭、鄱陽湖畔に所謂、楚青銅器文化が展開する。しかし楚青銅器文化群に属する遺蹟の出土土器は、灰陶ないし紅陶系で、印文土器を伴うものが少い。これは、楚青銅器文化が印文土器文化と結びつきの稀薄なことを示めしている。長沙遺蹟では、一九五一年以来、墳墓一六二基が発掘されているが、そのうち一二六基は、戦国期から前漢期のものである[48]。長沙の戦国期青銅器文化は、河南省信陽長台関、安徴省寿県の春秋戦国期青銅器文化群などの淮河流域の青銅器文化グループと密接な関係を持つていたとみられている。従つて、長沙を含む楚青銅器文化群は、たしかに地方色をもちながらも、基本的には、黄河—淮河の Unifier of China の文化を受容していたといえる。信陽長台関の楚墓からは、中原型式の漆太鼓、小鼓が瑟編鐘とともに発見されているが、ドンソン文化の銅鼓は、見出されず、他の要素のすべてについても、凌純声の予想したような[49]、ドンソン文化のオリジンを示唆するような文化様相は、全く見あたらないのである。

（B）〔南シナ海沿岸領域〕印文土器文化領域への青銅器文化のかさなり、即ち新石器時代文化の下限は、やはり中原に接している北の方に、早く現われる。南京北陰陽営遺蹟では、第4文化層が新石器晩期に属し、第3層に至つて、

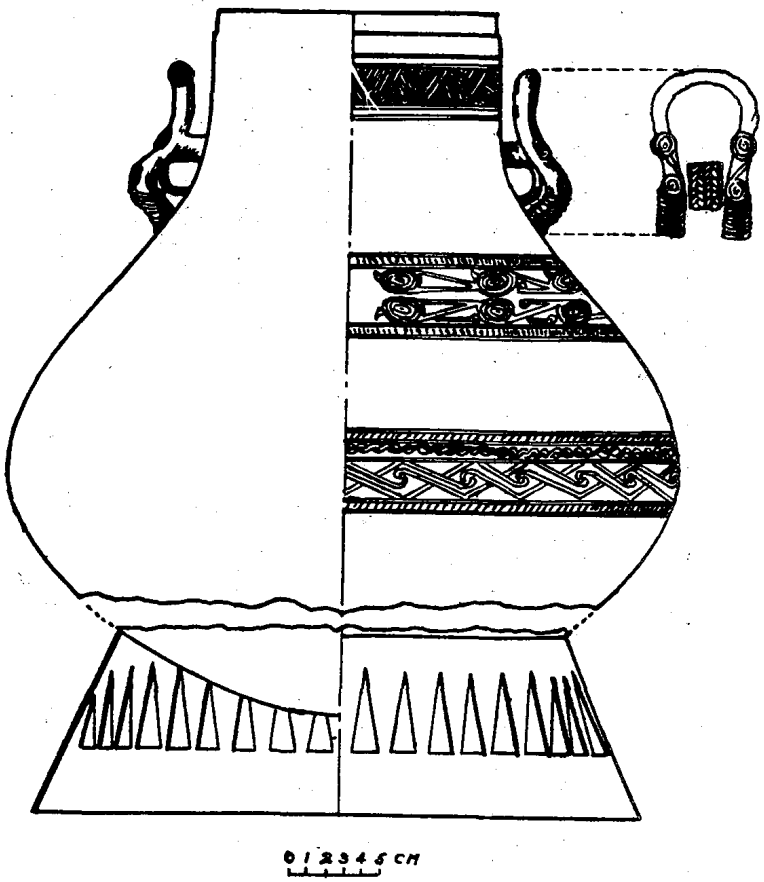
青銅器ないし金石併用期へ発展したのに比べ、広東珠江水系流域一帯では、広州飛鵝嶺、青山崗遺蹟などは、北陰陽営第3文化層の様相に類似するが、青銅器と共存していない。つまり当時の殷周文化が、南方に対して青銅器文化として影響を及ぼしていない。この地域に青銅器文化がはじめて現われるのは、戦国期に至ってからのようである。[50] それは、つねに戦国期青銅器のパターンと関連のあるといわれるダブルF文をもつ印文土器と共伴する。[51] この種の土器は、広東海豊から宝安、飛鵝嶺、香港石澳、獅子山、掃管笏、屯門、榕樹湾、大湾（Lamma 島）、洪勝爺砂丘、東湾などの諸遺蹟から出土しており、さらにその分布はインドシナにのびているようである。この他、広東・香港、インドシナ・トンキン地方の印文土器の文様は、比較的精緻で、互に共通するものが多い。D. J. Finn は、このダブルF文土器と青銅斧が共伴することを注意している。Lamma 島遺蹟から出土した青銅斧は、三つのタイプに分類される。[52] すなわち、タイプ1・階段式の方角斧に類似するもので、刃部は直線状をなす。その中の一つは両側に縁がとびだしていて、刃端から階段のところまで及ぶ。そしてその両凹面に平行隆起線の装飾を有する。タイプ2・刃部が半月形をなし、さらに両端において内側にまきこむ形をとるもの、方形の袋ソケットをもち、二面の溶笵から鋳造される。このタイプは、インドシナ、ラオス、ジャワ、セレベスにもみられる。タイプ3・刃部は弧をなして両側にゆるくひろがり、半月形をなす。ソケットの断面は、ほゞ方形。銎部の両面に条線の装飾を附すものがある。このタイプは、雲南、インドシナのものと共通し、溶笵の形式も、カンボジア Samrongsen 遺蹟のものに似ている。Finn によれば、このタイプ3の青銅斧が、土製溶笵とともにダブルF文土器と共存していることが確められている。東南アジア、雲南では、Lamma 島遺蹟のタイプ2、3の如きソケット形式の半月形斧の種々のヴァリエイションがある。これらは、総じて、シナ・プロパーの青銅器の中にはみることのできない形状をもつものである。陳公哲の調査では、香港、沙岡背から、タイプ3

の半月形青銅斧が、ダブルF文などの印文土器に伴出している。[53] このほか、広東では、広州の西、仏山、北部の韶関、英徳、新豊、仏岡、翁源大江頭山遺蹟などの印文土器遺蹟から出土しており、とくに翁源大江頭山遺蹟では、石器と幾何印文硬陶と青銅斧が同一層より出土したことを、報告者は強調している。[54] 海南島では、白沙県白打村で、半月形青銅斧が発見されているのをはじめとして、[55] いくつか報告がある。さて、この半月形青銅斧の編年的位置は、飛鵝嶺遺蹟の新石器文化期にすぐ接し、磨製石器、石環、ダブルF文を含む印文土器などと複合して、金石併用期に入るものである。インドシナ及び、インドネシアでは、半月形青銅斧は、ドンソン文化の特徴的な遺物として、銅鼓とともに東南アジア青銅器文化のインデックス的性格を持つている。Lamma 島遺蹟を中心に、金石併用期文化のメルクマールと考えられる他の要素としては、青銅円鈴、玦状石輪、有角玦状石輪、有角亜正方形石輪、石製円盤、石鈴、T型腕輪（T Section Ring）、碁石状円盤、青銅ナイフなどがあげられる。これらを含むいくつかの要素は、漢文化影響以前の所謂、土着文化を示めしているものとして、鹿野忠雄博士は、「原ドンソン文化」Proto-Dongson Culture を想定したが、[56] これらの要素はインドシナと共通するものが多く、この地域に同質的な文化領域が形成されていたことが推されるのである。

さきにのべた、ダブルF文のパターンが、戦国期青銅器のものとつながりをもつものであることが注意されているが、それと同時に、珠江水系流域では、戦国期に属するかなりの青銅器の存在を指摘することができる。すなわち、胡の長い戦国期形式の戈、円錐形袋穂に菱形の刃のつく矛、戦国期長沙のものに近い短剣、東周後期そのまゝのかえりの長い二翼式鏃などが出土しており、陳公哲の調査では、胡の長い戈が、香港東湾の遺蹟からダブルF文などの印文土器に伴つて発見されている。[57] 岡崎敬氏によれば、広東省博物館には、広州附近から出土したという青銅剣、矛が収められ

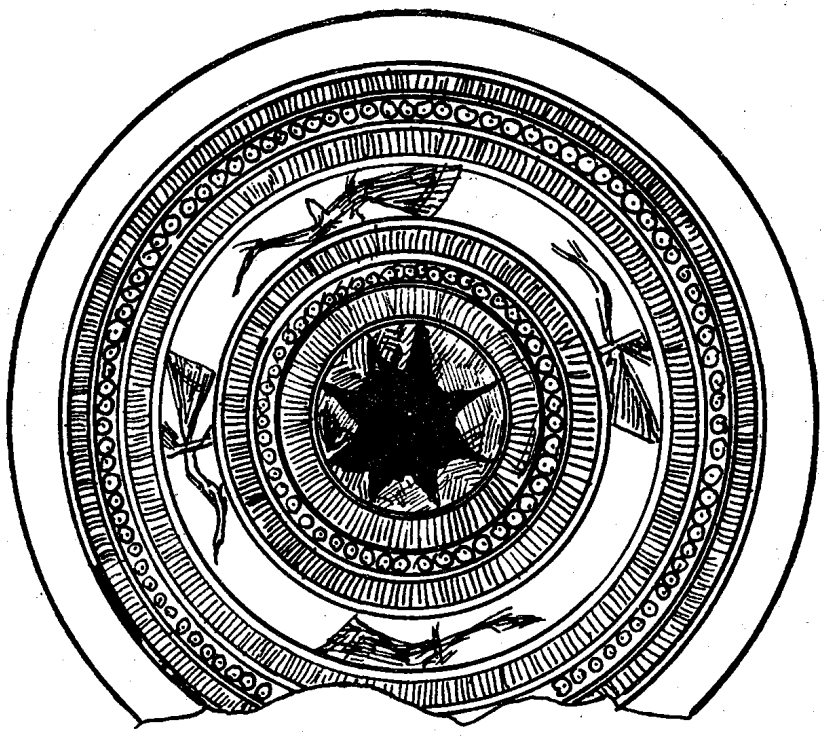
ているが、これらは戦国期シナ青銅器の南伝を示めしている。[58] このような条件を考慮してみると、この地域における金石併用期文化の開始に際して、これら戦国期シナ青銅器文化の強い刺戟があつたことが考えられる。

墓葬遺蹟についてみると、珠江デルタ地帯を中心として、最も早いものは、前漢初期に及ぶものがある。漢墓の設営にともなつて、珠江水系流域一帯は、急激にシナ金属器文化が豊富化する。前漢代の墓葬遺蹟は、一九五五年にすでに約六〇基が調査されている。さて、これら前漢代の墓葬遺蹟のいくつかは、かなり特徴的な様相を示めしている。広東広州華僑新村の前漢墓は、[59] 漢初から武帝以前、おそくとも前漢中葉を降らないものとされているが、とくに重要な副葬品として、青銅鏡は全て早期の形式であり、その殆ど大部分が、湖南長沙の楚墓から出る所謂、楚鏡のカテゴリーに入るものであることは注意を要する。ことに羽状文地四山字文鏡と呼んでいるものは、先秦鏡の代表的なものである。これに反し、土類器には、印文土器の手法を残したものがあり、青銅器の壺、鼎、釜、錐壺などには、シナ製作とはみられないユニークなものを含んでいる。例えば、第49号墓から出土した青銅壺



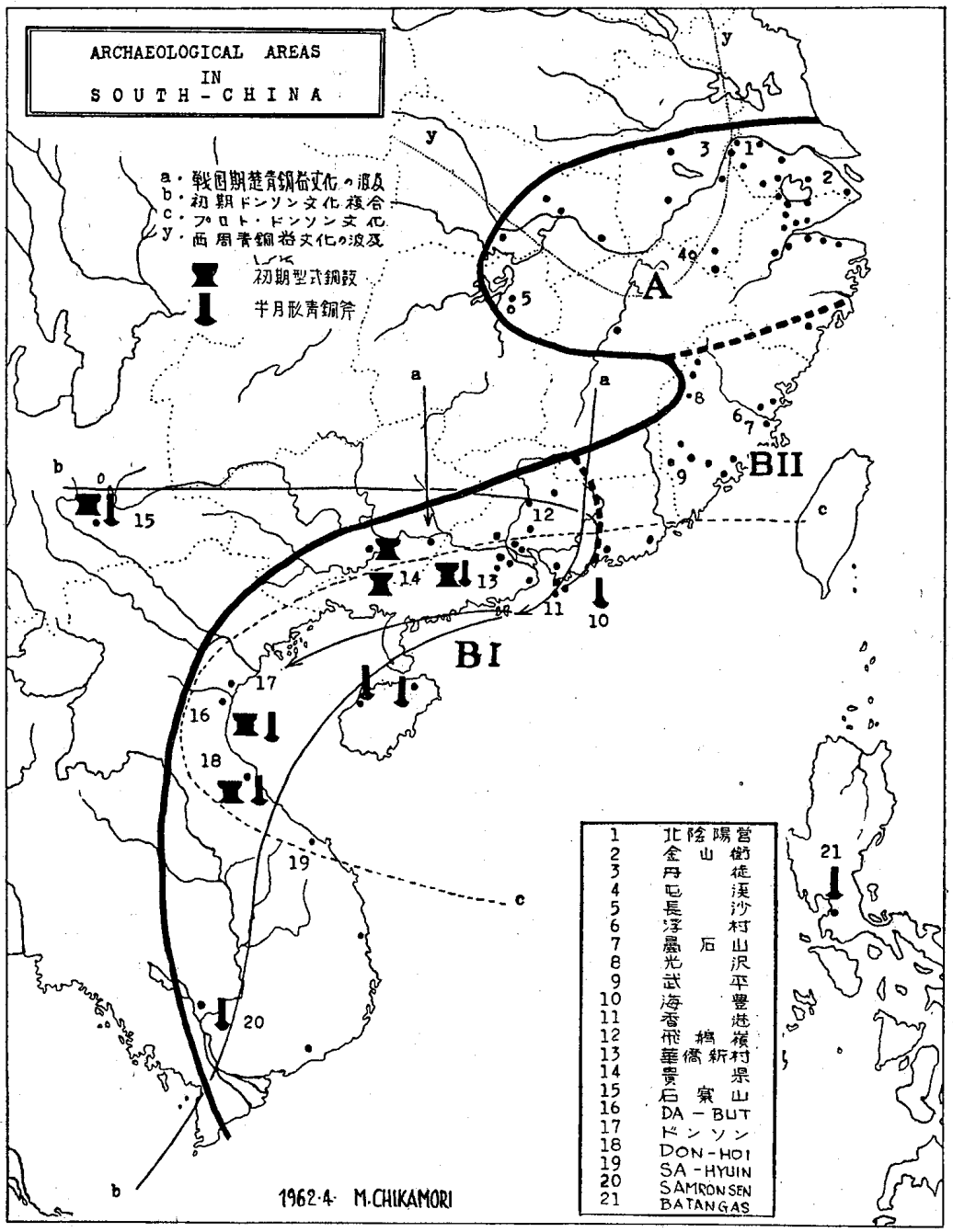
(Fig. 1)

(Fig. 1) は、高さ四三糎、径三六・六糎で、形は直口部、腹部、圜底部にわかれ、圜足はラッパ状に開き、三角形の鏤孔がある。頸部の上に二個の環形の把手がつくが、それにはS字状のラセン渦文がつけられ、そのつけ根の部分に縄索文が施されている。器体部の文様は、三つの文様帯に分かれており、直口部をめぐるものは、鋸歯状の細線文で、上下に平行線がそれぞれ四本走る。肩部をめぐる文様帯は、正面のところで、対象的な左右二組に分かれる。文様は、同心円のラセン渦文と切線とを連続的に排列したもので、上下に平行線と、列点文が附けられる。腹部をめぐる文様帯は、上下に平行線と列点文が置かれ、その間に二個のS字状文を連続的に組み合せた文様があり、その上に縄索文がめぐる。以上、こゝにみられる文様が、ドンソン文化の銅鼓と全く共通することは注意せねばならない。すなわち、S字状のラセン渦文、同心円と切線の連続文などは、Ngoc-lu 寺銅鼓、Saleier 銅鼓、Hoan-ha 銅鼓など所謂第一型式銅鼓に、かならず、ともなう文様である。また直口部文様帯に施される鋸歯状細線文は、第一型式銅鼓の文様帯を構成する特徴的なものであり、縄索文は銅鼓の把手につけられるものと共通する。これらの諸点は、ドンソン文化の位置づけに、何らかの示唆を与えるものと思う。またドンソン遺蹟から出土し、所謂ドンソン・タイプの遺物として特徴的な青銅製桶型容器が、[60] 前漢前期に属する広東広州西村の石頭岡墓葬遺蹟から出土している。[61] また、とくに注目されることは、珠江水系、西江の上流、広西貴県の前漢墓から銅鼓が発掘されていることである。[62] (Fig. 2) 銅鼓を出土した第8号墓は、木槨墓で、米字文や、斜小方格文、円圏文などの印文土器、前漢五銖銭、内行花文精白鏡など各種の青銅器を伴出している。銅鼓は、高さ二七・五糎、鼓面直経四二・二糎。四個の半円の把手がつき、鼓面のデザインは、完全に第1型式を示めしている。こうした Non-Han Chinese の要素に対して、珠江水系流域に分布する前漢墓は、多くの点で湖南長沙のものに類似し、その間に、文化的系譜関係をたどることができる。



(Fig. 2)

さて、以上みてきたように、珠江水系流域一帯が、シナ青銅器文化を戦国期以来、受容し、はなばなしい青銅器文化を展開してきたのに比べて、南シナ海沿岸領域の北半すなわち、浙閩山塊地域は、この時期に、青銅器文化のかさなりを殆どみないのである。そのなかにあつて、福建光沢県油家壠遺蹟から半月形青銅斧を出土していることは、それが南方の金石併用期文化の様相に近いことを示めしている。(63) しかし全体として、閩江以南のこの地域は、依然として有段石斧の文化が残存したようであり、豊かな青銅器文化の開花した珠江水系流域とは、全く異質な性格を示めしている。すなわち、印文土器文化領域として、福建、広東の南シナ海沿岸は、一つの同質的な文化領域を形成していた通有性が、珠江水系流域における青銅器文化の受容以降、急激に、相互に異質化の傾向を生じ、文化的に、浙閩山塊地域と珠江水系流域の二つの文化領域（サブ・エリア）を生み出したのである。それは明らかにシナ青銅器文化の受容の差異に基くものであつて、その両者の地域差は、文化遅滞（Culture-lag）の差違の度合として現われてくるのである。同じ沿海地でありながら、両地域は、青銅器文化を育てるカルチャー・ランドとしては、かなり違つたものであつたと考えられ、青銅器文化期に入つて、珠江水系流域は、文化



〔ドンソン文化の起源に関するアーケオロジカル・エリア〕

的に、その沿海平野としての性格が強調され、一方、福建地域は、山塊地としての性格をますます強めていつたようである。そこに沿海地と山塊地との文化的対照が、あざやかに示めされているとみることが出来るのである。こうした現象は、文献史学上からも、福建地区のシナ化が非常に遅れることが知られている。[64] 両広がシナ領になつたとき、漢の勢力は、福建の越族（閩越）にも働きかけているが、効果があがらず、この地方がシナ領として完全に繰り入れられるようになるのは、ずつと後代になつてからのようである。

Ⅳ　ドンソン文化における戦国期青銅器文化要素

ドンソン文化におけるシナ戦国期の青銅器文化との関係は、すでに B. KARLGREN が、その論文 "The date of the Early Dong so'n Culture" で詳細に指摘した。それは主として HEINE-GELDERN のドンソン文化西方起源説に対する批判を通して、年代観の問題において、淮河式青銅器文化との関連を重視したのである。[65] しかしこの KARLGREN 説は、銅鼓と淮河式青銅器にみられる文様の単なる類似要素を比較しただけであつて、そこに方法的弱点があつた。しかしながらその後 O. JANSE によるドンソン遺蹟の発掘調査がつゞけられ、出土した青銅器群の中には、明らかにシナ戦国期の青銅器を含むことが認められたのである。すなわち、剣、矛、戈などは、明らかに東周後期、戦国期シナ青銅器文化に属するものであり、また V. GOLOUBEW の記述にみられるドンソン遺蹟出土の身に格子状の文様のある剣は、[66] やはり戦国期に属するものである。[67] こうした点において、梅原末治博士は、インドシナ北部に発見される銅戈が、シナ青銅器文化の波及を物語るものであり、それが戦国時代をくだるものではないことを指摘されている。[68] なお最近、ボルネオ、サラワクの Niah 洞窟遺蹟で発掘されたドンソン・タイプの青銅器に対して、T. HARRISSON

は、紀元前二五〇年というカーボン・デイティングによる実年代を与えているが、[69] 東南アジアの青銅器文化に対して、はじめて求められたこの実年代は、大陸部におけるドンソン文化の年代観にも、大きな意義をもつている。[70] さて、こうした現象は、珠江水系流域においても、全く同じように認められる。すでにのべたように、広州附近から出土した胡の長い戈、円錐形の袋穂に菱形の刃のつく矛、短剣、かえりの長い二翼式鏃などは、戦国期シナ青銅器文化に一般的にみられるものである。ことに香港東湾と、Lamma 島遺蹟から出土した胡の長い戈は、この説明に充分な資料的根拠を与えるとともに、広州華僑新村の前漢初期の墓葬遺蹟から、早期型式の銅鏡、所謂楚鏡が出土していることは、その文化的系譜関係を示めしていると考えられる。

最近の発掘結果によれば、淮河流域の青銅器には、春秋時代の呉蔡のものと、戦国時代の楚のものとがあり、後者の青銅器は、長沙の戦国期の遺物と共通することが知られている。したがつて、B. KARLGREN の説く淮河式青銅器とドンソン文化との関係は、揚子江中流域の戦国期の楚青銅器文化を中間に置いて考えることが、最も妥当であると思う。こうしてみると、青銅器文化として、南嶺山脈を越えて、最も早く珠江水系流域—北部インドシナ地域に入つたのは、戦国期シナ青銅器文化といつても、直接には湖南長沙を中心とする楚青銅器文化群に属するものであつたと考えることが出来る。したがつて、ドンソン文化の発生過程に、ある一定の楚戦国期青銅器文化の作用があり、その要素を包含しているとみられるのである。また、この戦国期青銅器文化の侵入が、さきにのべた南シナ海沿岸領域を文化的に分断する現象をひき起したものとみてよい。そこで紀元前四〜三世紀、戦国時代に燕が遼東地方へ、秦が蜀地方へ競つて領域を拡大させたころ、楚が南方、西南方へ進展を示めす文献史上の出来事が、この際の文化現象として注意する必要があると思う。しかし、それが政治的軍事的なものであるというのではなく、青銅器文化としてのドンソン文化の発生が、

楚文化の地理的、時間的動態とおゝいに関係があるということをみるのであつて、この点について、楚の文化的動態の研究を進めることは、ドンソン文化のオリジンの問題を掘りさげる際に、重要な鍵になると思うのである。

V　珠江水系領域におけるドンソン文化の起源的様相

このようにみてくると、珠江水系流域一帯は、いくつかの文化要素のひろがりが、かさなりあう様相に、かなり特徴的なものが認められる。まず、あらゆる文化的かさなりの基盤をなしているものとして、大地域的な印文土器文化の領域があり、この中にサブ・エリアとして、南シナ海沿岸領域がある。そして、それが青銅器文化のステージへ変容をとげる過程において、新たに珠江水系流域の文化領域を形成したのである。この領域における青銅器の出現する時期、すなわち金石併用期文化の要素として、印文土器、とりわけダブルF文などは、海豊以北になく、むしろトンキンの沿岸にのびており、青銅円鈴、有角玦状石輪、有角亜正方形石輪、石製円盤、T型腕輪（T Section Ring）及び、半月形青銅斧などは、珠江水系流域を中心として、南シナ海をめぐつて、インドシナ、フィリッピンを含む特有なひろがりを示めしている。銅鼓についてみれば、この珠江水系流域は、たしかに一つの中心であつたようであつて、現在、広東省博物館には、最も多くの銅鼓が収蔵されているということであり、またF. HEGER の集成した一六五例の銅鼓のうち、広州の銅鼓とされているものは六〇以上に達しており、[71] この地が銅鼓の製作の要地であつたことは、古文献にも記載が多い。（「広州記」の「謂狸獠鋳銅為鼓、鼓唯高大為貴」、「晉書食貨志」の「亦謂広州夷人、宝貴銅鼓」、「隋書地理志」の「則謂自嶺以南、二十餘郡、並鋳銅為太鼓」など）

さて、楚の戦国期青銅器文化としては、珠江水系流域は、その周縁部に位置することになる。しかし、それはまた同

時に、その青銅器文化が、南シナ海沿岸の印文土器文化領域と接触するところでもある。いくつかの文化領域のかさなりあいは、それらが互に接触するところであり、新らしい影響が作用するところである。従つて、そこは文化要素の変化が行なわれやすい。[72] 戦国期楚青銅器文化の周縁部としての珠江水系流域が、こうした意味で、新らしい文化の起源的中心を占めるに至つたことは充分考えられるところである。こゝにみられる珠江水系流域における種々の文化要素の広がりのかさなりあいが、これらの諸要素を、こゝで総合し、一つの新らしい全体として、すなわち、要素複合体として、ドンソン文化を生み出していつたのであろうと考える。

次に、これを時間的脈絡において考慮しなければならない。湖南長沙では、戦国期から前漢の前期、後期を通じて木槨墓が盛行する。[73] また、さらに南に下つた耒陽からは、銅剣、銅矛、帯鉤を伴なつた戦国期の土坑墓が報告されている。[74] しかしながら、珠江水系流域では、前漢初期以前の墓葬遺蹟の確かな例は、全く発見されていない。これは、おそらく、戦国期の楚青銅器文化の珠江水系領域へ与えた影響が、定着的な政治的移動を伴なう組織化された伝播（Organized Diffusion）としてではなく、文化的次元において、いわゆる自然的伝播（Natural Diffusion）[75] として、ナイーブなかたちで侵潤したことを示唆しているもののようである。従つて、また、こうした考古学的事象は、戦国期までのシナ民族の実際の活動舞台が、長沙―耒陽をその南限としていることを示めしている。漢の高后の時、漢軍が南越を攻めようとして、暑湿がはげしく、広東陽山嶺を越えることが出来なかつたという「史記」南越尉佗伝の記事は、南嶺の分水嶺が、強力なエコロジカル・ラインとして、文化領域の分界線を形成していたこと（印文土器文化領域における分界線と一致する。）をみることが出来ると同時に、広東地域一帯が、自然的にも、文化的にも固有なエリアをなすのに充分な基盤を有していたことを物語つている。この領域のこうした強い地域性は、比較的、地域的ヴァリエイション

のあらわれにくい後漢代の遺物にもみられるのである。すなわち、広州、香港、貴県などの後漢の陶製明器のうち、屋、倉、井戸などの形式には、この地域の湿潤地帯的環境によつて規定されたものがあり、高床式や、床柱のつく倉、四本の支柱が井戸枠の外に出て屋根をもつ井戸などにもみられるように、その土地に適応した様式が現われている。(76) また、陶器や明器の製作に際しては、印文土器の手法が、かなり遅くまで残存する。あれほどシナ・プロパーに劃一的な文化要素を拡散した後漢代の文化も、こゝでは、かなりの適応的変容を余儀なくさせられているのである。すなわち、シナ文化のこの地域への伝播は、単なる波及としてではなく、一面において、エコロジカルな適応としてあらわれる。こうした現象が、戦国期青銅器文化の侵潤の際には一層強く現われているのである。

戦国期の楚青銅器文化要素は、広東・珠江水系流域の印文土器文化の上に、適応的にかさなりを示めしつゝ、その印文土器文化領域の文化母胎の中で、新らしくアカルチュレイションを起したようである。すなわち、一方では、シナ戦国期青銅器を直輸入したまゝの、戈、剣、矛などが存在すると同時に、他方では、シナ・プロパーにはみられない利器や斧、装飾品などの青銅器を新らしく生み出している。また、器形にはシナ文化的な形態を残しながら、文様において、銅鼓文様などのドンソン文化要素が附加される。すなわち導入されたモデルから模倣された形態が、リプロデュースされる過程において、ネイティブな要素をとりこみ、或は、全く新たな製品をつくりだしている。おそらく、こうした文化変容過程において、金石併用期文化としての、プロト・ドンソン文化を生み出したと考えられる。さらに、やがては、銅鼓がこうした地域的文化力によつて、シナ青銅器文化の適応と、アカルチュレイションの所産として発生し、ドンソン青銅器文化を形成していつたのである。（おそらく、こうしたプロセスの間において、V. Goloubew の説く、籐製置台 Trong-d'on の上に扁平な太鼓を置いた形態—Mu'ong 族—が、青銅技術によつて、銅鼓としての形を整え

るようになつたのではないだろうか。）従つて、青銅器文化としてのドンソン文化は、あくまで、シナ青銅器文化それ自体ではなく、その受容形態としてあらわれるのである。それは、松本信広先生の指摘されたように、シナの青銅器文化が、拡大する過程において発生するのである。[77] それ故に、ドンソン文化的要素が、シナ青銅器文化諸要素のコンプレックスの中に、モザイック状に点在するかたちで、形成されるのである。それは、たとえば、ドンソン遺蹟や、貴県の遺蹟でみられる銅鼓を含む諸遺物の組み合せにほかならないのである。そこで、こゝにおけるドンソン文化の遺蹟は、シナ文化と、既存の土着文化との相互交渉にともなう、物質文化上の地域的文化複合としてとらえることも、あながち不可能なことではないのである。したがつて、そこには、シナ青銅器文化の受容の仕方、この地域への組み込まれ方に、ドンソン文化の固有の姿と性格が、示めされているとみるべきであると思うのである。

このようにみてくると、この地域における銅鼓の発生も、次のような文化変容過程から生まれてくると考えられる。すなわち、(1)戦国期シナ青銅器が、異質的要素として、いわばナマのまゝ導入され、受容された過程。(2)導入された青銅器が、その地域に適応し、リプロデュースされる過程において、ネイティブな要素すなわち、ドンソン文化要素が添加する。(3)既存の土着文化が、青銅技術の導入によつて、新らしい固有な文化要素として、銅鼓を生み出す過程。したがつて、ドンソン文化を、そのどの過程でとらえるかによつて、時間的にも巾があり、その年代観にもかなりの差を生ずることになる。今後、なされるべきは、こうしたクロノロジーの確立にあると思う。

さて、このようにして、ドンソン文化を開花させた珠江水系流域と、それにつながるトンキン平野一帯も、後漢代に入ると、塼室墓のひろがりとともに、次第に漢文化の勢力でおゝわれてしまうのである。ドンソン文化が発生し開花する時間は、それほど長いものではなかつた。しかして、ドンソン文化は、この地域が、それ以前の新石器時代から文化

基盤を共有していた東南アジア（インドシナ・インドネシア諸島）へ、むしろその個性を強く発揮しつゝ、新らしく発展する。この拡散の過程で、ドンソン文化は、そのシナ的な文化要素を次第に脱落させて、最もドンソン文化的な極点Climaxへ、特殊化現象の方向をたどつたのではないかと考える。また一方、漢文化が、低平地を南進し、占居していく過程で、ドンソン文化は山間部に垂直的に追い上げられてしまい、その波動から浮き上り、そこで銅鼓文化を保存したが、しかし、それはシナ文化から完全に遮閉されてしまつたのではなく、絶えず、シナ文化の働きかけを受けて、二次的発展として、雷文を附した銅鼓の如き後出のタイプを生み出したと考えられるのである。

結　語

以上、ドンソン文化の起源地の問題を中心として、アーケオロジカル・エリアの発見と吟味をくりかえしつゝ探索してきた。まだ、何といつても、この地方の調査は僅かである。これを今後、発掘が進められ、資料を検証、整理していくための、発見的動機を期す意図をもつ一つの作業仮説として提示したい。ドンソン文化のオリジンは、たしかに南シナ沿海地方において、かなり、海洋的性格の強いものであつたようであり、それが、古文献上の越人と密接なつながりをもつていたと考えられる。銅鼓のデザインにみられる鳥船や、その他一連の要素は、そうした性格の一面を表わしている。ただ、それは単純なものではなく、ドンソン文化の起源にみられる著しい複合性と変容性の中に、その本質的な性格をみるべきであると思う。また、ドンソン文化の形成の問題は、アンナン民族の起源の問題とも関係が深い。早くから論争のあるこの問題に対して、今後この方面よりする考古学的アプローチは、一層、重要な役割をもつものであろう。

（一九六一・四・一〇・）

註

(1) SCHMELTZ, J. D. E., Bronze-Pauken im Indishen Archipel. Internationales Archiv für Ethnographie, IX. 1896.

(2) HIRTH, F., Über hinteindische Bronze-Trommeln. T'oung Pao I. 1890, 137—42.
HIRTH, F., Chinesische Ansichten über Bronze-Trommeln. Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen, Berlin, 1904. 200—57.

(3) MEYER A. B. und Foy., Bronze-Pauken aus Südostasien. 1898.

(4) DE GROOT, J. J. M., Die antiken Bronze-Pauken im ostindischen Archipel und auf dem Festlande von Südostasien. Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen, Berlin, 1901, 76—113. 坪井九馬三訳（史学雑誌 13篇）

(5) HEGER, F., CR analytique des séances: Ier Congrès International des Etudes d'Extrême-Orient, Hanoi, 1903.

(6) 鳥居龍蔵「苗族調査報告」東大人類学教室 1907, 223—249.

(7) GOLOBEW, V., Sur l'Origine et la Diffusion des Tambours métaliques. Praehistorica Asiae Orientalis, I, 1932, 137—50

(8) HEINE-GELDERN, R., L'Art préboudhique de la Chine et de L'Asie du Sud-est et son influence en Océanie. Revue des Arts Asiatiques, 11, 1937, 177—206.

(9) KARLGREN, B., The date of the early Dong-So'n Culture. Bulletin Museum of Fareastern Antiquities, 14, 1942, 1—28.

(10) 梅原末治「東南アジアの銅鼓観」と題する一九六〇年五月二十五日夜、東京、東洋文庫の春期講座の講演席上で述べられた。

(11) 梅原末治「北部仏印発見の銅戈について」羽田博士頌寿記念、東洋史論叢、1950, 173—189.

(12) 凌純声「記本校二銅鼓兼銅鼓的起源及其分布」国立台湾大学文史哲学報　I, 1950, 9—62.
LING SHUN-SHENG, New Interpretations of the Decorative Designs on the Bronze Drums of Southeast Asia. Academia Sinica, No. 2. part 1, 1955, 195—208.

(13) 松本信広「日本の神話」至文堂日本歴史新書　1956, 75—83.
なお、銅鼓の起源地をインドシナ北部ではなく、もつと北方におく見方は、すでに GOLOUBEW の論文の批判を通して指摘されている。（松本信広「印度支那の民族と文化」1942, 86—87.）

(14) 雲南省博物館「雲南省晋寧石寨山古墓群発掘報告」1959.

(15) 近森　正「雲南に於けるドンソン文化の問題—晋寧石寨山遺蹟—」史学 32巻1号　1959, 67—93.
雲南石寨山墓葬遺蹟から、明器的な用途を示めす状態で、銅鼓が発見されている。しかし、梅原末治博士の説かれるように、これらの銅鼓は、貯貝器であつて、本来の銅鼓からは推移したものである。（一九六〇年五月二十五日、東洋文庫春期講座における講演「東南アジアの銅鼓観」）石寨山墓葬群の中で、最も古いとされている第一類型墓（M・14号—前漢早期）から出土した銅鼓についてみても、ティピカルなドンソン文化の文様要素が、具象的な連続文に土着化していく過程を示めしている。すなわち石寨山遺蹟の銅鼓群は、かなりくずれたタイプから出発して、明器化していく過程にあるとみられる。石寨山遺蹟のクロノロジーから、銅鼓のオリジナル・タイプをひきだすことの出来るようなものが、今日のところ見当らない。石寨山の銅鼓文化の系譜的関係としては、牂牁江ルートによる広東方面との交渉が予想される。

(16) JANSE, O., Archaeological Research in Indo-China. Vol. III, 1958, Bruges St-Catherine Press, 91.

(17) 梅原末治「北部仏印の青銅器時代に就いて」史林　三十二巻一号　1948, 35.

(18) 梅原末治「安南省東山出土の土製支脚」人類学雑誌　五十九巻三号　1944, 1—4.

(19) SOLHEIM, W. G., Southeast Asia. Asian Perspectives, Vol. 1, No. 1—2, 1957, 46—49.
SOLHEIM, W. G., Tow Major Problems in Bornean (and Asian) Ethnology and Archaeology. The Sarawak Museum Journal, Vol. IX, No. 13—14, 1959, 1—5. なお、SOLHEIM は、ドンソン遺蹟の土器について、それがボルネオ西サラワクの Bau の土器に類似していることを指摘している。

(20) 尹煥章「関於東南地区幾何印紋陶時代的初歩探測」考古学報　一九五八年第一期　75—85.

(21) MANSUY, H. Contribution à L'Etude de la Préhistoire de L'Indochine, III—Résultats de nouvelles recherches effectuées dans le gisement préhistorique de Samrongsen (Cambodge). Mem. Serv. Géol. Indochine, X, 1933.

(22) QUARICH WALES, H. G., The Making of Grater India. 1951, 79.

(23) 金関丈夫、国分直一「台湾先史考古学における近年の工作」民族学研究 Vol. 18, No. 1—2, 1953, 67—80.

(24) SOLHEIM, W. G., Tow Major Problems in Bornean (and Asian) Ethnology and Archaeology. The Sarawak Museum Journal, Vol. IX, No. 13—14, 1959, 1—5.

(25) 蔣纘初「関於江蘇的原始文化遺址」考古学報　一九五九年四期　35—45.

(26) 安徽省博物館「安徽省石器時代遺址的調査」考古学報　一九五七年第一期　21—30.

(27) 湖北省文物管理委員会「湖北圻春易家山新石器時代遺址調査簡報」考古通訊　一九五六年三期　24.

藍蔚「略談三年来武漢市的文物保護発現」文物参考資料　一九五六年七期　17—18.

(28) 高応勤、周抱権「湖北黄石市六処古遺址調査紀要」文物参考資料　一九五六年二期　49—52.

(29) 王勁、呉瑞生、譚維「湖北京山岡石竜過江水庫工程中発現的新石器時代遺址簡報」文物参考資料　一九五五年四期　42—46.

(30) 曾昭燏、尹煥章「試論湖熟文化」考古学報　一九五九年四期　47—56.

(31) 印文土器文化遺蹟の立地型にみられる水辺的、海洋的性格は、いわゆる軟陶期から硬陶期にわたつて、ほゞ共通しており、その文化的ひろがりの性格を決定している。それがまた、有段石斧のフィリピン、ポリネシア地域との関係、有肩石斧の東南アジア地域との関係などの要因となつていると思う。

(32) 尹煥章「南京鎖金村遺址第一、二次発掘報告」考古学報　一九五七年三期　13—30.

(33) 南京博物院「南京市北陰陽営第一、二次的発掘」考古学報　一九五八年一期　7—24.

(34) 西谷真治「東南海浜の印文土器」世界陶磁全集　8, 1955.

(35) 曾凡「福州浮村遺址的発掘」考古学報　一九五八年二期　17—27.

(36) 鹿野忠雄「東南亜細亜に於ける管状穿截文化」東南亜細亜民族学先史学研究 I, 1931, 215—226.
(37) FINN, D. J., Archaeological finds on Lamma Island near Hong Kong. The Hong Kong Naturalist, Vol. III, No. 3～Vol. IV,No. 2, 1932—33.
(38) 鹿野忠雄「東南亜細亜に於ける有角玦状石輪」東南亜細亜民族学先史学研究 I, 1931, 227—234.
(39) 安志敏「中国古代的石刀」考古学報　一〇期　1954. 饒恵元「略論長方形有孔石刀」考古通訊　一九五八年五期、40.
(40) 羅香林は、この現象をもつて、有孔石斧を東夷の遺物、孔のない石斧を越族のものに比定している。
羅香林「百越源流与文化」1955, 40.
(41) 尹煥章、張正祥「寧鎮山脈秦淮河地区新石器時代遺址普査報告」考古学報　一九五九年一期　13—39.
(42) 江蘇省文物管理委員会「江蘇丹徒県煙墩山出土的古代青銅器」文物参考資料　一九五五年五期　58—62.
陳夢家「西周銅器断代（四）」考古学報　一九五六年二期　図版 1—10.
(43) 王志敏、韓益之「介紹江蘇儀徴過去発現的古代青銅器」文物参考資料　一九五六年一二期
(44) 安徽省文化局文物工作隊「安徽屯溪西周墓葬発掘報告」考古学報　一九五九年四期、59—90.
(45) 樋口隆康「新発見の西周銅器群とその問題点」東洋史研究　一六巻三号、40—61.
(46) 少量の印文硬陶と釉陶が混在している。印文土器が次第に釉陶に置き代えられていく一過程とみられないだろうか。
(47) 石竜過江水庫指揮部文物工作隊「湖北京山、天門考古発掘簡報」考古通訊　一九五六年一期　11—19.
この遺蹟は、印文土器と直接の関係はない。本文中、第Ⅱ節でのべたように、揚子江をさかのぼると、印文土器は、かなり稀薄である。
(48) 中国科学院考古研究所「長沙発掘報告」田野考古報告集考古学専刊丁種第二号　1957.
(49) 本文、序章、註（12）参照
(50) 一九五七年、訪中考古学視察団として渡中された水野清一教授の報告によると、広東省恵陽県から一個の青銅鼎が発見されている。（広州博物館）これは粗雑な製作の上、破損しているが、肩に虺竜文帯があり、形態は一見して西周のものと認められる。これについて、水野教授は「かならずしも、この時代を西周とみるわけにはいかぬが、戦国時代よりも古い時期に中原の

青銅器文化が波及したもの」とし、又、これを紹介した藤田国雄氏は、「西周の影響を示めしている」とされた。だが、これをもつて直ちに広東の青銅器文化を西周代に引き上げることは、果して妥当であろうか。それはいわば単独な出土の仕方を示めしており、孤立的な存在である。文化現象としてその遺物のあり方は、特殊的であり、おそらく、後代に伝世品として搬入されたものと考えるが、かりにもし、西周期に近い早い時期に、海上まわりなどによつて当地にもたらされたものとしても、この単独的発見状態は、多分に移植的なものであつて、一つの文化水準を形成するような普遍的文化現象とみなすことは出来ない。（水野清一「広洲」原田淑人編　中国考古の旅　1957, 96. 藤田国雄「大陸関係」考古学ノート 5, 1958, 180.）

(51) ダブルF文＝D. J. FINN は、香港 Lamma 島遺蹟の発掘によつて得た土器を a～h の八類に分類し、その h 類として、Fの字を二つ互に背中あわせにつけた形を連続してスタンプするパターンを The Double—F Pattern と呼び、さらにそれを一五種のヴァリエイションに分けている。

(52) FINN, D. J., Archaeological Finds on Lamma Island near Hong Kong. The Hong Kong Naturalist, Vol. III, No. 3～Vol. IV, No. 2, 1932—33.

松本信広「香港舶遼州の発掘に就て—フィン師を悼む—」史学　一七巻一号　49.

松本信広「香港の発掘に就て」史学　一二巻四号　708. 松本信広「再び香港の発掘に就て」史学　一三巻一号　82.

(53) 陳公哲「香港考古発掘」考古学報　一九五七年四期　1—16.

(54) 莫維「一九五七年広東省文物古蹟調査簡記」文物参考資料　一九五八年九期

(55) 金関丈夫「胡人の勾ひ」117.

(56) 鹿野忠雄「先史学よりみたる東南亜細亜に於ける台湾の位置」東南亜細亜民族学先史学研究 II, 179—180.

(57) 陳公哲「香港考古発掘」考古学報　一九五七年四期　図版陸—15.

(58) 岡崎　敬「漢代明器泥象と生活様式」史林　四二巻二号　1959, 39—78.

(59) 麦英豪「広州華僑新村西漢墓」考古学報　一九五八年二期　39—75.

(60) 梅原末治「安南清化省東山出土の桶型銅器」史林　二八巻四号　1943.（「東亜考古学論攷」所収　413—428.）

(61) 広州文物管理委員会「広州南郊南石頭西漢木槨墓清理簡報」文物参考資料　一九五五年八期　85.

(62) 黄増慶「広西貴県漢木槨墓清理簡報」考古通訊　一九五六年四期　18—20.
広西省文物管理委員会「広西省貴県漢墓的清理」考古学報　一九五七年一期　155—162.
(63) 曾範「福建光沢新石器時代遺址調査簡報」考古通訊　一九五五年六期　16—23.
(64) 和田　清「秦の閩中郡に就いて」東洋史研究　一巻五号　1936, 1—11.
(65) (9) と同書
(66) GOLOUBEW, V., L'Age du Bronze du Tonkin et dans le Nord-Annam. Bulletin de L'École Française d'Extrême-orient, tome 29, 1929, Pl. III.
(67) (60) と同書，註9参照
(68) (11) と同書
(69) HARRISSON, T., The Caves of Niah: A History of Prehistory. The Sarawak Museum Journal, Vol. 8, No. 12, 1958, 549—595.
(70) 近森　正「Borneo Sarawak Niah 洞窟遺蹟の発掘について」民族学研究　二五巻四号　1961, 67—70.
(71) HEGER, F., Alte Metalltrommeln aus Südost-Asien. 1902, 10—11.
(72) KROEBER, A. L., Anthropology; Race, Language, Culture, Psychology, Prehistory. 1948, 424—5.
(73) (48) と同書
(74) 湖南省文物管理委員会「耒陽西郊古墓清理簡報」文物参考資料　一九五六年一期　37.
(75) WISSLER, C., Man and Culture. 1923, 128—180.
(76) 広州市文物管理委員会「広州出土漢代陶屋」1958, 3.
伊藤清司「漢井の分布をめぐる一問題」日本人類学会日本民族学会連合大会第一三回紀事　1959, 24—26.
岡崎　敬「漢代明器泥象と生活様式」史林　四二巻二号　1959, 39—78.
(77) (13) と同書　75—76.